

奄美諸島におけるシャリンバイの需要量と流通

鹿児島県林業試験場 東 中 修

1. はじめに

奄美大島には伝統産業として大島紬があり、その名は全国的に知られている。

大島紬の純生産は54年度において1,767,800万円となっており、農業の純生産1,773,600万円に匹敵する生産を上げ、奄美における主幹産業であるサトウキビとともに大半の島民の生計を左右する重要な地位を確保している。また、産業別15才以上の就業者数は55年の国勢調査では72,334人となっており、この中で大島紬関係の従事者は56年度23,314人であり、約32%の人が紬関係の仕事に従事していることになる。

このように奄美にとって重要である大島紬は、他に類例のない生産技術としてシャリンバイを原料とする泥染紬が現在も存続し、本場大島紬として地位を維持しており、今後もこの伝統技法を引継いでいくことが唯一の活路であるといわれている。

しかし、このシャリンバイ資源も、長年の伐採利用によって資源の枯渇が懸念される状態となっている。

2. シャリンバイ需給の全国的動向

紬にシャリンバイ泥染をしているところは全国的にみると、奄美大島・沖縄・鹿児島市の3ヶ所であり、鹿児島市の場合、2業者が屋久島からシャリンバイを移入して観光などの目的で細々とやっているにすぎない。

沖縄は久米島において久米島紬を生産しているが、この染色にはオキナワシャリンバイを使用している。

久米島紬の生産量は56年度約1万反で、これに使用したシャリンバイは200t程度と見込まれる。

大島本島については、泥染に使用されるシャリンバイは表-1に示すとおり毎年3,000~5,000tが見込まれる。使用されるシャリンバイは今まで大島本島(加計呂麻島を含む)、徳之島からの原木によってまかなわれてきたが、最近では沖縄からの移入原木も相当な量にのぼっている。なお、56年度のシャリンバイ使用量は約4,000tであるが、この主な供給先について大島本島のチップ業者4名のききとり調査では沖縄・徳之島から各1,000t程度移入され、その残り2,000tが大島本島からの供給によってまかなわれているという。

しかし沖縄・徳之島のシャリンバイも、あと10年もす

るとなくなるといわれており、大島支庁では毎年公有林・部落有林を中心に年間80~100haのシャリンバイ造林を進め島内需給をめざしている。

これらの造林に対しては、本場大島紬協同組合からも助成が行われている。

3. 大島紬1反当りのシャリンバイ使用量等

大島紬1反当りを染色するのに必要なシャリンバイ使用量は、本場大島紬協同組合の資料によると、20~25kgで平均22.5kgといわれている。ちなみに30年生のシャリンバイの平均胸高直径は6.2cm、平均樹高4.6mであり、これの1本当り重量は8.9kgとなる。従って泥大島紬1反を染色するには30年生樹で2~3本必要といえる。なお、泥染業者がチップ業者から買い入れているチップ価格は60kg(100斤)当り57年現在で3,600円である。大島紬1反を染色するのに平均22.5kg必要なので、1反当りに占めるシャリンバイの値段を計算すると1,350円となる。また、1反当り泥染大島紬の平均製造原価に占めるシャリンバイの割合を試算した結果は、わずか1.3%にすぎなかった。

4. 大島紬のシャリンバイ需要量

大島紬に使用されるシャリンバイの需要量は、年間いくらぐらいか正確に把握された数値はない。

そこで大島紬の中でシャリンバイを必要とする泥染・泥藍染の生産反数からシャリンバイの需要量を推定することにした。昭和49年から57年までの過去9ヶ年の生産反数を上げれば表-1に示すとおりである。生産反数が一番少なかったのは49年で約13万反、1番多かったのは55年で23万反で、過去9年間の平均で18万反である。これに大島紬1反当り染色するのに必要なシャリンバイ使用量22.5kgを乗じてみると、シャリンバイの年間需要量は最低で49年の約3,000t、最高は55年の5,000tで、平均してみると4,000t(シャリンバイ原木で3,600m³)となる。

5. シャリンバイの生産・流通・加工のあり方

シャリンバイの流通経路は図-1に示すとおりである。私有林の場合、シャリンバイを取扱業者が伐採集荷

してチップ業者へ持ち込み、チップ業者がこれをチップにして販売しているのが大半である。中には取扱業者から直接泥染業者へシャリンバイ原木が販売され、これを泥染業者が自分で手割りや小型機械でチップ化している例もある。

国有林の原木は大半が大島紬協同組合を通じて立木で払い下げられ、その後の流通は民有林の場合と同じである。また表一2に示すとおり、奄美大島には泥染業者が現在79名ほどいるが、このうち61業者(約80%)がシャリンバイをチップ業者から購入している。このようなチップ業者の出現によって今まで自分で原木を購入していた時の煩雑さがなくなり、非常に便利になったといえる。従って今後シャリンバイの生産・流通・加工の形態は、チップ業者を媒介としてシャリンバイのチップを購入する方法が定着するものと考えられる。

泥染業者の話によると、手割したチップと機械割りとは、機械割りの方がシャリンバイの煎出液の濃

度がうすいといわれている。しかし大島紬技術指導センターの試験結果では、機械割りの方が煎出時間が短縮でき、しかも濃度は変わらないと報告されている。

そこで機械割りの煎出液がうすくなる原因については、チップを工場から泥染業者へ持って行く間の乾燥が影響しているものと推測される。従って今後はチップ化したものはできるだけ迅速に泥染業者へ届けるか、またはチップの厚さを少し厚くして乾燥を防ぐなどの対策を講ずる必要がある。

参考文献 (1) 熊本営林局：奄美諸島におけるシャリンバイ造林に関する技術的調査 11~39

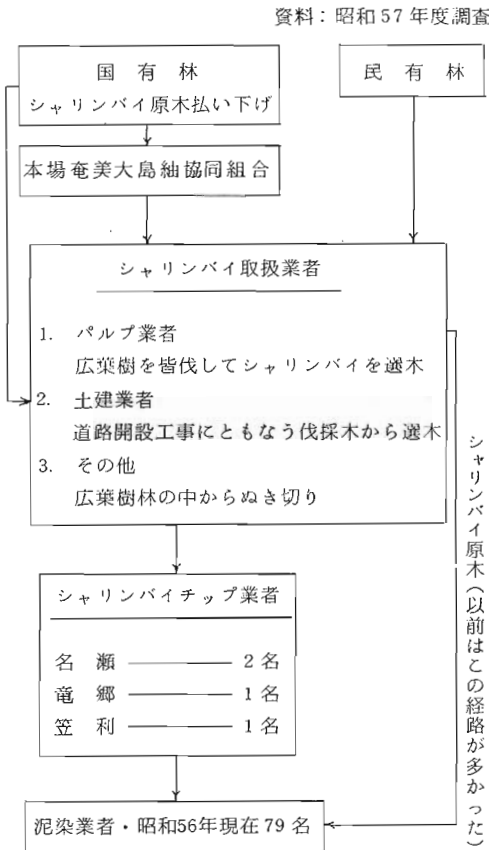
表一1 泥染・泥藍染生産量

資料：大島支庁商工水産課 期間 各年1月~12月

年度	泥 染	泥 藍 染	合 計	1反当りシャリンバイ使用量	シャリンバイの年間需要量
昭和49	11,445	121,486	132,931	2.25 kg	2,991 t
50	14,496	134,260	148,756	〃	3,347
51	27,782	163,334	191,116	〃	4,300
52	65,596	149,591	215,187	〃	4,842
53	68,049	128,757	196,806	〃	4,428
54	82,381	133,451	215,832	〃	4,856
55	112,330	120,801	233,131	〃	5,245
56	105,795	75,738	181,533	〃	4,084
57	80,057	67,715	147,772	〃	3,325
計	567,931	1,095,133	1,663,064		37,418
平均			184,785		4,158

4,158 ÷ 1.151 = 3,613

図一1 シャリンバイの流通経路



表一2 泥染業者のシャリンバイ購入方法

資料：昭和57年度ききり調査

地区名	泥染業者数	シャリンバイの購入方法
名瀬市	40名	大型チップ工場から購入 3業者だけは各自原木購入・手割りによってチップ化
竜郷町	17	大型チップ工場から購入 5業者は各自原木購入・小型機械によってチップ化
笠利町	12	大型チップ工場より購入
宇検村	5	各自原木購入 小型機械によってチップ化
住用村	2	
瀬戸内町	1	
高昇町	1	
徳之島町	1	
合計	79	